

害虫の誕生

—変化する人と虫との関係—



ヒトと一番身近な自然は害虫かもしれません。ヒト社会の変遷とともに害虫と呼ばれる生物は生まれてきます。ヒトと害虫の関係を歴史的、実践的に科学史、生態学、応用昆虫学の立場から検証しこれからの害虫対策を提案します。

第67回日本衛生動物学会大会/公開講座
平成27年3月29日(日) 15:00—16:50
金沢大学医学類十全講堂 (石川県金沢市宝町13-1)
※来聴歓迎/聴講無料

講師/講演内容紹介

瀬戸口明久(京都大学人文科学研究所)独特の視点で科学を斬る
著書『日本の動物観-人と動物の関係史』東京大学出版会
共著『害虫の誕生-虫からみた日本史』ちくま新書, 他

ハエが害虫になるとき—昆虫・病原菌・ヒトの環境史

ハエはいかにして害虫になったのだろうか。そのためには少なくとも二つのステップが必要である。第一段階は、ハエとヒトの共存関係の確立である。ヒトの進化の過程のどこかで、その居住環境に適応した野生のハエが出現した。これはおそらく牧畜や農耕と同じくらい古いことだろう。第二段階は、人間がハエを「害虫」とみなし徹底的に駆除しはじめる時点である。これは比較的最近のことで、20世紀前半に起こった。本報告では、後者の転換がどのように起こったのか明らかにする。

茂木幹義(元・佐賀大学) ミスターモスキート 世界的衛生昆虫学者
著書『ファイトテルマター—生物多様性を支える小さなすみ場所』海游舎,
『マラリア・蚊・水田—病気を減らし生物多様性を守る開発を考える』海游舎, 他

蚊対策のめざすところ—蚊と人と自然

病気の媒介者および不快害虫としての蚊対策の基本は、問題の多くは人が作りだした環境問題であるという認識である。人の手の入らない自然度の高い環境で発生する蚊による被害が問題になる場合もあるが、多くの問題は、人里に適応し、人里で人の作りだした水たまりから発生し、人を好んで吸血する蚊によってひきおこされる。目前の被害と緊急事態に対処するため、速やかな実施と効果が期待できる方法と仕組みが必要なことは言うまでもないが、それによって問題の一時的な軽減がもたらされても、長期的・根本的な軽減や解決は、人がどのような環境を望み、どのような環境をつくってゆくかということにかかっている。居住者、生産者、利用者の理解だけでなく、具体的な協力なしには実施できないし、効果も上がらない。

大串龍一(金沢大学名誉教授) 日本を代表する昆虫生態学者、作家
著者『農薬なき農業は可能か』農山漁村文化協会、『天敵と農薬 ミカン地帯の11年』海游舎, 他

害虫と共存する農業

日本の柑橘産業は近世に出来上がったものであるが、約300種の昆虫はミカンの樹に寄生して枝葉や樹液を利用しながらミカン産業にはほとんど損害を与えていない。損害を出している種は少数でほとんどの虫はミカンと共存しているといってもよい。実害があるのは、害虫の発生しやすいような管理をしたか、侵入まもなくミカン栽培に適応する時間が無くミカンの樹と共倒れするような生態を維持している種である。ミカンの葉を食べ、枝に食い込んでいる虫を直ちに害虫として農薬を使って殺すのではなく、増えて実害が出ないような管理をすることがこれからの害虫防除の方向ではなかろうか。

申し込み不要。会場周辺駐車場は有料です。
公共交通機関のご利用をお勧めします。
お問い合わせ: 第67回日本衛生動物学会大会事務局
E-mail: eido@p.kanazawa-u.ac.jp,
Tel: 076-234-4464, Fax: 076-234-4464